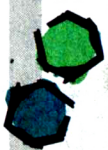


ひろしま



歴史回廊

第12部・近世の自然と暮らし④

江戸時代も後半の文化十一(一八一四)年、広島藩では藩領全般の地誌「芸藩通志」作成のため、村々の諸情勢を詳しく調査、報告させた。その各村からの報告書「国郡志書出帳」(略称)には、村で見られる獣類の記載まである。

そのうち代表的な動物について、安芸地域のうちいくつか郡別にその記載率を図示してみた。

■山県郡には狼や熊

内陸部の山県郡には、やはり熊がいた。ここでは割愛した佐伯郡でも吉和村などに熊が記載されている。山県郡では、また狼も多く、の村にみられる。対して猪はやや少なめで、狼が天敵、しかも雪深い

動物の分布 江戸後期 島で猪減る

地域は苦手という伝承は本当かもしれない。猪は、むしろ高田郡や賀茂郡などに多く、狼のあまりいない人里近い山々にいたようである。

そして何より注目するべきは、この段階になると猪の記載が安芸郡では減り気味で、島々にはほとんど見えないことである。ほかにも、キツネ、マミ(アナグマ)、イタチ、テン、カワウソなどの記載もあるが、おおむね沿岸部や島々では動物相が貧弱になっている。因島には猪や兎もいないという。

■人間活動が活発化

ところで、この「国郡志書出帳」は残念なことにあまり現在に伝えられておらず、また獣類記載が省略される例もとどまる。例えば、図中にも記入したように山県郡では七十四力村のうち三十九力村しかデータが取れていない。そのなかでの記載率である。また、狼の記載が二ホンオオカミをさすのか、狼と併記する山犬をどう理解するかなど不明な点も多い。

しかし、前回までみてきた沿岸部や島々における人口増加と開墾の進展など、人間活動の活発化、それらを背景とした猪狩りなどによって、一九世紀には沿岸部や島々から猪はかなり駆逐されていたのである。

現代の猪被害の再来は、むしろ減反や林野の放置など、人と自然とのかかわりの大きな変化が背景にあるのではないか。

(広島大学教授・佐竹昭)

土曜日に掲載します

19世紀初頭、広島藩領安芸地域における「動物相」

